シンポジウム『下水文化を継承することの意味を考える』

下水に対する新たな認識形成のために

流通科学大学　酒井　彰

一、はじめに

私自身、諸先輩がおられるなかでまだまだ文化など語る資格はございませんが、本日このシンポジウムの企画に携わっているなかで、「どうしていま、文化を考えることが必要なのだろう」、「歴史から学ぶといって、一体何を学ばなければいけないのだろう」ということを考えてみました。

我々の多くはこれからもこの都市という空間と言いますか地域に住み続けなければならないわけですが、この都市での生活というものは、いろいろな都市装置によって支えられているわけです。下水道もその都市装置のひとつなのですが、住民の多くが自分たちの生活を支えている都市装置のことをほとんど意識しなくなってきている。私自身、いろいろな都市装置のなかで、水に関するもの以外はほとんど知らないわけですが、少なくとも下水道や水道、都市河川といった水に関する都市装置についてみたとき、こう言えるのではないかと思います。そして、住民が都市装置と接したりする部分も非常に限られているように思えます。

「都市に生活し、さまざまな都市装置に依存していながら、それを意識しない生活で良いのだろうか？」、「都市装置を意識しないことがさまざまな都市問題、環境問題の原因になっていないだろうか？」と思うわけです。そして、こうした無意識から、水との関わりの文化が失われていっているように思えるわけですが、「多くの都市住民がそのことに気が付かないままでいいのだろうか？」というのが、このシンポジウムにおける問題提起なのだと思います。

そして、これからの下水道や環境のあり方を考えていく基本として、我々が生活のなかで使

った水、あるいは都市の快適性・利便性維持のために、速やかに流すことだけを考えてきた雨水、これらについてどのような認識形成が求められていくのだろうかということについて考えてみたいと思います。

二、文化を継承することの意味

そこでまず、文化を継承することの意味を、日本下水文化研究会の立場で考えてみたわけですが、『都市や地域で生活を営むためになくてはならない施設が、どのように使われていたかを、時代の背景とともに学び取り、後世へ伝えていくこと』であると考えたいと思います。この伝えるということが、将来の水環境や水文化とどのようにつながっていくかということについて、これから考えていきたいと思います。

私は、今年から大学で「都市政策論」なる科目を担当しているのですが、その講義で言いたいことは、ただひとつだけです。それは、先程も述べたように、都市生活者が都市で生活するうえではいろいろな都市装置に依存しているわけですが、都市そのものが大きくなると都市装置も巨大化し、そして高度な技術が応用されてくるわけです。また、巨大化した都市装置は大量の資源求めるようになります。その結果、都市住民の多くが、もうこれは専門家にお任せするしかないと都市装置への関心を失ってしまい、ほとんどその存在を意識することが無くなるから、あって「当たり前」で、「自然物」かのごとくに意識してしまっているのではないか。そして、都市自体がもともと脆弱な基盤のうえで、キャパシティ以上の活動を行っているのに、住民がそのことを認識しておらず、住民の無関心が多くの都市問題の背景にあるだろうと言うことです。

このように、無関心が蔓延してくると、都市装置がもともとどのように成り立ってきたのかなどということに思いを馳せる者などいなくなってしまいます。そこで、岡先生には都市装置が成り立っていくうえで、文化とどのような関わりがあったのか、その辺のお話を伺いたいとお願いしております。

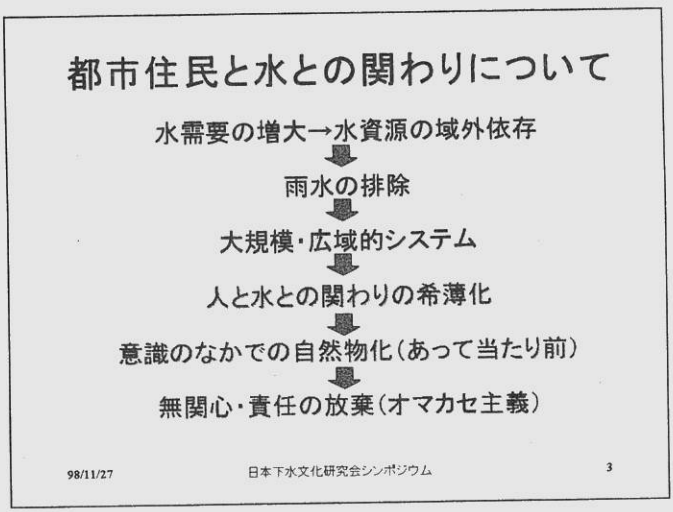
行政の方は、そのようなことを住民にあまり関心を抱かせないことが良いことだとしてきたようなふしがございます。昨今では、「市民とともに」などと言っておりますが、少なくとも、これまでは、都市装置の意義を市民がきちんと

認識してもらい、市民の認識のもとで施策を展開するといったことに欠けていたことは確かではないかと思います。まあ、このようなことはそう簡単には変わらないのではないかという気がいたします。

なお、この講義のなかで、どうして今の都市装置は我々にとって身近でないのかということを学生にレポートの課題として出したのですが、そこに書かれた内容は、行政が市民に対してこれまで行ってきたこととこれから何をなすべきかについて、ユニークな視点や提案もありますので、あとで紹介したいと思います。私自身、行政のお手伝いをしてきたということで、こんな外からの視点を知るというのは、貴重なことだと思っています。

三、都市装置に無関心になった背景

都市装置に関し、住民が無関心になっていった経緯を水に関してみてみますと、ＯＨＰ１のようになると思います。現実の都市で起きてきた順序は必ずしもこの通りでないかもしれませんが、水需要が増大し、都市域とその周辺だけでは水を供給しきれなくなると、上流域や他水系に水源を求めるようになります。そうすると、そこでもともと利用してきた雨水や都市周辺域の湧水などへ依存する必要性がなくなってきます。そこで、都市に降った雨はもっぱら排除し



ＯＨＰ１

ようということになる。また、水源を遠く他流域に求めるようになるということ、都市の高密度化と拡大する都市規模によって雨水流出量はますます増え、限られた都市の用地条件のなかで雨水排除のためにゆとりのない、景観など度外視した施設を建設することになります。下水道の方でも広域的なシステムができあがると、これらの施設は住民からどんどんと遠い存在になっていってしまいます。身近に感じられなくなるということは、さっきも申したように意識のなかで「自然物」化していって、利用できることがもう当たり前になってきます。また、大規模で、高度な技術が使われるものですから、どういう施設をつくるとか管理なども行政にオマカセしようと言う意識がどんどん強くなっていきます。

ここのおられる方は「これでは変だ」と気づかれているかもしれませんが、このことがどうしていけないのかについては、これからお話ししていきたいと思います。

都市住民と水との関係がこのように希薄化した原因はどこにあるのでしょうか。（ＯＨＰ２参照）

一つ目はやはり、都市の発展はどこまでも良しとしてきたことだと思います。都市が発展してきたのは、それなりの必要性があったのでしょうが、都市問題の根源でもあるわけです。水に関して言えば、これが日本の都市の発展にブレーキをかけることはこれまでなかったと思い

都市住民と水との関係が希薄化した原因は？

- ❑ **都市活動の拡大をどこまでも是としてきたこと**
- ❑ **必要な水資源は必要なだけ収奪することを合理化してきたこと**（資源環境問題）
- ❑ **不用なものはできるだけ速やかに身のまわりから排除しようとしてきたこと**（廃棄物問題）

⇩

- ❑ *結果としてリスク認知能力（とくに環境リスク）の低下＋楽しみの喪失*

98/11/27　日本下水文化研究会シンポジウム　4

ＯＨＰ２

ます。今でもまだそうだと思います。技術で自然を改造することで、もともとの低湿地に多くの人が住み、他流域の水を使いたいだけ使っているのです。

つまり、必要な資源を使うことについては、たとえ環境を犠牲にこれを使うことを合理化してきたことが、今日の資源環境問題を提起しているわけですが、都市水問題もこれと同根のところがあります。そして、二つ目の不用なものはできるだけ速やかに排除したいとう意識は今日の廃棄物問題をもたらしていると思うのですが、雨水や汚水の排除に起因として起きている問題は、廃棄物問題とまさに同根であるといえると思います。今日の都市装置は、都市住民が集積のメリットや高い利便性を求める一方で、水との関わりを排除するという意識を容認してきたと言えると思います。蛇口以外に水と触れる機会もなく、コンクリート三面張りで、場所によっては水面や対岸も見えない都市河川すら容認してきたのです。

それでも、都市装置の整備のおかげで快適な都市生活がおくれ、都市環境だって改善されているという見方もできるでしょうが、それで良いのかという気がしませんか。そこで申し上げたいのは、先ほどの水との関わり方の希薄化が、都市において水がもたらすリスクを認知する能力の低下につながっていると言うことです。

ここで言うリスクという言葉は最近よく出て参りますが、投資に関わるリスクというようなことではなく、我々が浸水被害に遭うリスク、あるいは、我々が使用した化学物質が人間の生命・健康や生態系に損害を与えるかもしれないというリスクです。

地球環境問題が、人類の生存そのものに関わるところに原因があると言われている以上に、都市問題もそこで人間が生活し活動することに原因の多くが関わっています。その原因者である都市住民が、この問題に一切関与せずによいのかという気がします。関わっていくためには、このリスクを認知する能力が伴っていることが必要であると思います。

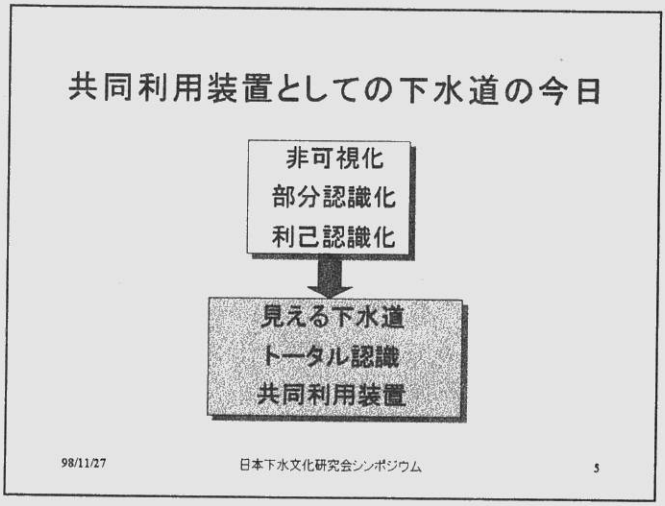
四、今日の下水道で何が問題か。

ここで、下水道のことに問題を絞って整理してみましょう。ＯＨＰ３をご覧下さい。

下水道という都市装置が、身近に感じられないというのは目に見えにくいと言うことが原因になっていると思われます。これは、誰もが言

近では、どんな物質がどのように流れているのかが見えない。これは一つに、雨水の流出に起因する汚濁の問題であり、もう一つは有害化学物質の問題であります。この二つが重なった降雨時の有害物質や病原微生物の問題はさらに見えにくくなります。これに関しては、あとでも述べたいと思いますが、もう何でも受け入れるということでは、住民ばかりでなく、下水道を管理する側でも問題が見えにくくなって行ってしまいそうです。

そして、水洗トイレの洗浄水というような非常に限られた部分でしか認識しないということがあります。これは水道でいえば蛇口ですね。蛇口も水洗トイレも都市を巡る水循環のなかでひとつのごく限られた部分なのですが、そんな限られた部分でしか水と接することがないので、そういう認識しかできない。したがって、水道の水がどこから来ているのか、そして、トイレを洗浄した水、厨房の排水がどこへ流れていくのかということに思いを馳せることなどほとんどありません。自分の家の排水がどの処理場へ流れていっていることとも知らない人は多いはずです。さらに言えば、家庭から出る排水に対して下水道というサービスがなされているこってきたように地下に敷設されているということだけにとどまらず、大規模化し、高度技術が応用されているため、関わりにくいということもあるかと思います。そういう意味で「見えにくくなっている。」ということです。さらに、最



OHP 3

と、そして下水道料金を負担していることも知らない人だって少なくないと思います。こういうことを知らない人達が、自分の排水が、どこの川、どこの海に流れていっているのかなど関心があろうはずがありません。

そして、生まれたときからこうしたサービスを家庭のなかで受けているから、まさに自然にあるものが如くに当たり前化しているがために、どんな使い方をしても何がその後生じるかも全く知らない人達も出てきます。

もともとは水道も下水道も住民が共同で使用するものでした。今年十二月号の雑誌「東京人」で、「近代水道の百年」という特集がくまれています。本会の稲場代表も神田下水のことを書いておられますが、明治３１年淀橋浄水場が完成したとき、多くの人はまずは共同栓を通して近代水道の恩恵に浴したということです。各家庭へ配管されている現在でも、水道は本質的には今でも共同利用装置なのです。にもかかわらず、電化製品のように自分一人のものであるかのように意識されているのではないでしょうか。この利己的認識に基づく下水道の使用が、先ほど申したリスクをもたらしたり、コスト増を招いたり、環境へのインパクトをもたらしているやもしれないと考えられるわけです。ひとつ例を申し上げましょう。私の大学の留学生が書いたレポートなのですが、使った油を台所から流してはいけないと聞き、それではと水洗トイレに流していると書いていました。なんということをと思われるかもしれませんが、環境にやさしい生活の提案といった情報の不正確さ、下水道のＰＲ不足に起因するもので、決して笑うことは出来ません。

五、これからの下水道の広報

このような下水道の現状を打開するためには、当然のことかもしれませんが、こんな事態の反対、すなわち、見えやすくすること、住民がトータルで認識できるようにすること、共同利用装置なのだということを認識できるようにすることが重要になってくるわけです。

こういうことを考えてきますと、これまでの下水道の広報、さらにいえば下水道博物館といわれるものがこうした役割、すなわち見える下水道を目標に、水循環の一部であり水循環トータルで認識してもらう必要があること、そして共同利用装置であることをきちんと伝えてきたのかという疑問が生じてきます。

私もこのようなことに気づいたり、感じることができたのは商学部という文系学部で、（今文系・理系で学問分けること自体の弊害も指摘されていますが）教えるという機会を得たからだと思っています。

ここで、少し学生のレポートから彼らの了解を得てどんな見方がされているか紹介したいと思います。手前味噌になるかもしれませんが、彼らもこの講義を受ける前は、こんな事を考えたことはおそらくなかっただろうと思います。そして、行政側からのＰＲが功を奏して、恩恵をありがたがり、煩わしいので行政に依存していきたいという者もいます。これは正直な気持ちでしょう。しかし、たとえ、下水道の仕組みなどを教えられたとしても「ああなるほど」で終わってしまい、そこでおしまい、記憶に残せる自信もないともらしています。これは、部分しか伝えられていないためではないでしょうか。住民にとったら下水道などもひとつの部分に過ぎません。水環境、あるいは水循環全体との関わりがわからなければ興味もわかないといったところでしょうか。

そこで、どうすれば身近になるかということですが、ＯＨＰ４に示す３つが大事だということはあまり異論はないのではないでしょうか。学生のレポートでも便利さの恩恵を受けない状況を経験しなければ身近に感じる事などできないのではと言っています。そのためには、たまにストライキをする、時代をバックさせる、そして震災の経験を伝えていくなどがあげられて

都市住民と水との距離を近づけるために

- ❑ 共同装置として利用していた時代の文化に学ぶ
- ❑ 環境教育
- ❑ 情報開示

➔新たな文化の創造

98/11/27　日本下水文化研究会シンポジウム　6

ＯＨＰ４

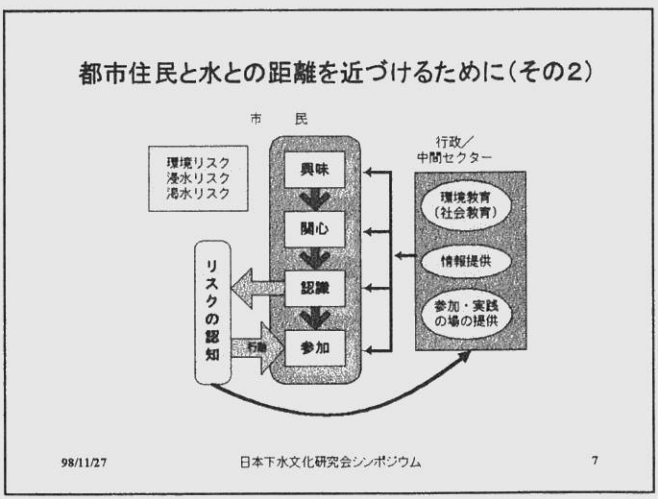
います。

今日のシンポジウムで、こんな話をしているのは、まさに共同装置として利用していた時代の文化に学び、新たな文化を創造していくことが、これからの下水道をはじめとする都市装置に、今求められているということが言いたかったがためであると言うことができます。さっき言いましたの時代をバックさせるというのもこれに通じることです。

ＯＨＰ５は、都市住民と水との関わりを再度近づけるために何をしたらいいかということを図に表してみたものです。

先ほどリスクの話をしましたが、損害を受けるかもしれないリスクを背負っているのは都市住民ですから、リスクマネジメントを担う都市装置の管理に住民が参画することは大前提になってくると思います。しかし、その住民が、ここにあげていますような「環境リスク」、「浸水リスク」、「渇水リスク」の存在を認知しないことには、その参加も行政への協力に過ぎないと思いますし、十分な説明・アカウンタビリティもなしに協力を求めたとしても、リスクの認知には至らないのではないかと思います。

この興味・関心・認識・参加というのが市民参加への認識の向上を示すものであろうと思うのですが、この向上をもたらすために、先ほどのＯＨＰ４で示した環境教育や情報提供が必要であり、各段階で手依拠する情報はより高度に



ＯＨＰ５

なっていくでしょうし、市民も学習を進めていかなければならないと思います。

これまでは、先ほど学生のレポートを紹介しましたように、情報の流れが一方的で部分的であったのではないかと思います。そして、ともするとよい面や適用されている高度な技術が強調されていた傾向はないでしょうか。行政の都合で縦割りになっていても市民はトータルで理解しようと思うでしょうし、技術的仕組みなど聞いてもなるほどと感心するだけで自分の生活と結びつけては考えないのではないでしょうか。

部分的であるということでは、多くの市民は、下水道のことだけ聞いてもなかなか興味を持続させることができないのではないかと思います。水の循環も市民の意識も行政の縦割りでは断続していないはずです。例えば、水循環トータルを理解して、下水道の役割や限界を知ることができるのだと思います。そして、部分的であるということで、最も問題なのは、今のシステムには問題がないと思わせていることではないかと思います。危機感を煽るというのではありませんが、市民が担うべき役割を持っていることを認識してもらい、その分担が果たされてこそ良好な水環境が維持できること、環境リスクの解消に向かうことを共通認識として持っていくべきだと思います。

六、おわりに

写真1は、多摩川源流の流れです。下水文化研究会では毎年多摩源流祭に参加し、我々が利用している都市用水の源を訪れ、上流住民の方と交流を行っています。このような清澄な流れが源になっていながら、都市で水を使い排水するということは、例えば環境ホルモンの影響を自然生態系に及ぼすかもしれないという環境リスクを伴っているのです。

日本下水文化研究会では、我々の生活と環境との関係をもっとよく知ろうということで、家庭で使われている有害物質に関する取り扱いガイドを翻訳いたしました。

いま、ダイオキシンのニュースが新聞紙上で報道されない日はないほどですが、我々の生活はさまざまな化学物質によって利便さを得ています。しかしながら、リスクをもたらすかもしれない物質についての情報は限られており、そういった物質の管理も十分ではありません。

下水道は汚水ばかりでなく雨水の排除の役割も果たしていますが、この雨水排除も含めて、

様々な化学物質、家庭や工場で使われるもの、燃焼による非意図的生成物を固形廃棄物や大気中の粒子から水系に輸送している可能性が高いということができます。いったん水系に出てしまうと、生物体内での濃縮進み、環境リスクは我々にまたふりかかってきます。

写真1

基本的にはこれらの物質は発生させないこと、十分な管理を行うことが重要です。例えば、下水道が雨水排水の施設を造り、管理していることを多くの住民は知らないと思いますが、雨水の流れた先がどこかというような情報がなければ、先ほどの利己的認識のもとでは、家庭での不用物、保管が面倒なものなどが勝手に流されることも考えられます。環境が人類共通の財産であることはわかっている人も多いのですから、是非、生活と環境を結ぶ下水道も市民が共同で利用する装置なのだという認識を形成し、新たなルールづくり、文化形成につながっていく活動をしていきたいものと思います。

下水文化研究会の活動の目的も、文化の継承と新たな文化の醸成を目的としたものであると考えています。諸活動を通して、次代を担う次世代の人々から社会のリスク、とくに水や化学物質のリスクの解消に少しでも役に立ちたいものというように思っております。

本日のシンポジウムテーマであります「何のために継承するのか？」ということを考える一助になればと思います。ご静聴ありがとうございました。